

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：33109

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593259

研究課題名(和文) 災害における喪失(死別および行方不明)に立ち向かう被災者を支える看護の検討

研究課題名(英文) Care for disaster-victims faced with loss of someone who die or go missing

研究代表者

小林 祐子 (KOBAYASHI, YUKO)

新潟青陵大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：20303232

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、過去の災害時の遺族の悲嘆反応や悲嘆ケアに関する調査から、災害における遺族への悲嘆ケアを充実するために、ケアプログラムに関する基礎的調査を実施した。その結果、災害急性期からの慢性期にかけての継続した悲嘆ケアの必要性とケアにおける看護職の困難さが明らかになった。東日本大震災に関連した被災者や支援者への調査をふまえて、災害時の悲嘆ケアに関するリーフレットを作成し、通常の死別時の悲嘆ケアとは異なる支援体制の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study, researchers examined previous studies of responses from survivors of disasters and distress care provided for them. Researchers subsequently conducted fundamental research on care programs in an effort to upgrade distress care for post-disaster survivors. Highlighted as a result were the need for consistent distress care for those survivors in their transition between the acute stage and the chronic stage after the disaster. Also highlighted was the difficulty of nursing staff in providing sufficient care. The study of survivors and their supporters after the Great East Japan Earthquake indicates the need to prepare a leaflet concerning post-disaster distress care. It calls for establishment of a support system different from those applicable to non-disaster distress care.

研究分野：基礎看護学

キーワード：災害看護 グリーフケア

1. 研究開始当初の背景

近年、国内で頻発している災害に対して、医療では発生直後から被災者への看護活動や支援体制の見直しが進められていると同時に、被災者のこころのケアが大きな課題となっている。阪神・淡路大震災(1995)以降、遺された者のこころの問題や遺児への支援が注目され、公的な支援以外に家族会の設立や災害時の地域社会での連携も取り込まれるようになってきた。その後、多発した震災や水害によって、災害看護においても急性期の医療だけでなく、避難所や仮設住宅等での健康支援をはじめとした継続的なケアが求められている。

災害時のこころのケアは、看護職だけでなく臨床心理士などの専門的なアプローチによって継続的に行われているが、災害時の喪失による悲嘆に関しては、遺された者の生活に大きな影響を及ぼす。これまでの災害医療に関する調査では、日航機墜落事故やJR福知山線脱線事故などで遺族の支援が報告されているが、主に被災者のこころのケアや健康状態に関する調査が多く、災害時の悲嘆ケアに関してはターミナルケア分野ほど関心が寄せられていなかった現状がある。

災害による死別での遺族への支援は十分でなく、遺族自らも被災者である場合、通常の悲嘆過程に沿ったサポートだけでなく、被災によって生活を変化せざるを得ない状況での十分な支援が必要となる。

死別悲嘆に関しては精神医学の見地から自死遺族の調査やがん患者の遺族のニーズなどが家族ケアの観点からサポート体制に示唆を与えており、医療施設での遺族外来の設立など、最近では医療の現場でも多くの取り組みがされている。また、日本人の悲嘆反応が欧米での経過との違いが明らかにされるなど、わが国での死別悲嘆に関する支援の充実に向けた調査が、支援プログラムの開発の重要性を裏付けるようになってきた。

遺族への支援では、遺族会やボランティアなどが運営することがほとんどで、わが国の大きな課題とも言える。このように概観してみるとターミナルケアを中心に医療専門職だけでなく臨床心理士やボランティアなどが悲嘆のケアに関わるようになってきたが、災害による死別悲嘆へのケアは大きな位置を占めないものであった。

このような中、2011年度に発生した東日本大震災では、多くの明らかな死別による喪失とあいまいな喪失(行方不明者)を生み出すことになり、被災者が同時に遺族となるなどこれまでに類を見ないほどの悲嘆に関する介入が早急に必要とされている。災害においてグリーフケアを必要とする被災者は、自身も災害によるストレスを抱えており、被災者のこころのケアは震災からの時間の経過とともに様相は違うものの、密なケアが必要とされるのは言うまでもない。

日本人の特性からも個人の死別の悲嘆は

表出されないことが多く、複雑な悲嘆を抱えることによって、うつ症状など残されたものの健康状態を左右するため、震災直後から避難生活全般を通して適切にこころの状態を把握する必要があると言える。

医療者や避難所の運営に携わる保健師の教育に関しては、2009年より看護基礎教育課程でも災害支援の基礎的な知識の理解が求められ、災害看護学の教授がこれまで以上に求められる時代となった。しかしながら、災害看護では急性期から始まる災害サイクルに沿った看護活動の中でこころのケアは押さえられているが、災害に関連した悲嘆ケアについては十分に教えられていない現状がある。災害における悲嘆ケアに関しては、支援する側の立場や考えによって提供されるケアに違いが生じることも予想される。

一方、遺族の悲嘆に関する調査は複雑性悲嘆など専門職の報告は多いが、看護の視点からグリーフケアがどのようにされているのか明らかにされていない。事故による死別と災害による死別による差やがんなどの疾病による死別とは、遺族の悲嘆過程が異なる可能性があると考えられる。

そこで、本研究では災害による死別悲嘆を持つ遺族の支援について、当事者と支援する側への調査から悲嘆反応や被災者のニーズから支援のあり方を検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

- (1) 国内外の災害に関するグリーフケアの現状と課題を文献検討から明らかにする。
- (2) 喪失に伴うグリーフおよびその支援に関する質的・量的調査から、災害時の悲嘆反応や悲嘆ケアの現状と課題を明らかにする。
- (3) 災害によって死別した遺族を対象にしたグリーフケアに関するリーフレットを作成し、ケアプログラムの検討を行う。

3. 研究の方法

本研究を看護の観点から災害における遺族のグリーフケアの支援体制を構築するための基礎的研究として位置づけ、以下のように計画した。

<調査1> 災害による死別悲嘆に関する国内外の文献検討

対象

国内外のグリーフケアに関する文献

実施時期

2012年6月~2013年2月

方法

分析: 災害時の心のケア、グリーフケアに関する先行研究から被災者の心理過程、支援の在り方、災害後の悲嘆過程やグリーフケアの内容を分析する。

<調査研究2>「災害による死別悲嘆に関する量的調査」および「災害死別した遺族の質的調査」

1)「災害による死別悲嘆に関する量的調査」対象

医療施設に勤務する看護師および市町村で避難所運営および災害後の継続訪問を行う保健師

内容および方法

震災および水害時の対応、遺族の状況、訪問活動および地域ネットワーク状況

先行研究および予備調査をもとに、自記式調査票を作成する。調査への同意が得られた対象施設の管理者を通して調査の趣旨を説明し、同意を得た上で実施する。

分析方法

回収したデータは単純集計し、さらに数量的演繹的手法で統計ソフトを用いて解析する。

2)災害死別した遺族の質的調査」

対象

東日本大震災または過去の災害によって家族と死別した遺族

方法および内容

悲嘆反応、日常生活状況、支援状況および支援者へのニーズ

分析方法

インタビューで得られたデータを質的内容分析法に基づいて実施し、グリーフケアに関する研究者からスーパーバイズを受ける。

<調査研究3>「グリーフケアに関するリーフレットの作成」

調査時期 2014年6月～2015年2月

方法および内容

先行研究および本研究によって得られた結果をもとに、医療専門職と遺族に向けた災害による死別に伴う悲嘆ケアに関する冊子を作成する。作成にあたってはグリーフケアの専門家、臨床心理学の専門家のスーパーバイズを受け、内容の妥当性に関する予備調査を経てから配布する。

試案した冊子を県内の専門職に配布し、内容に関する量的調査を行う。

ホームページ上にこれまでの研究成果とリーフレットの概要を記載し、公表する。

4.研究成果

<調査1>災害による死別悲嘆に関する国内外の文献検討

研究対象の論文の検索には、国内論文に関しては医学中央雑誌 Web を用い、国外論文は CINAHL と MEDLINE を用いた。検索の範囲は、1983年から2012年までとした。

検索時のキーワードは、「グリーフケア」「災害」を用いて検索した。用いた論文は原著論文を中心にし、資料等は除いた。国外論文は、bereave のキーワードを用いて検索した。

「災害看護」「悲嘆」のキーワードで検索し

た結果、17件しか抽出されず、「グリーフケア」「災害」のキーワードで検索した結果、164件が抽出された。次に原著論文に絞り込んだ結果、11件が抽出された。論文の表題および抄録の内容から、最終的に災害におけるグリーフケアに関する論文として10件を確認し、研究対象の論文とした。

論文の検討を行った結果、研究論文の内容に関しては、阪神・淡路大震災やJR福知山線脱線事故以降の災害急性期の悲嘆介入、複雑性悲嘆の治療プログラムの報告、東日本大震災では遺体安置所での遺体確認時の遺族への支援が主であり、2011年以降は東日本大震災に特化していた。

悲嘆プロセスでは、二重悲嘆モデル、デーケンの12段階モデル、意味の再構成モデルなどがあげられていた。東日本大震災に関しては、災害急性期のDMORT研究会、警察機関の検視業務などから、喪失を体験している被災者には遺体に関する正確な情報提供、遺体の尊厳ある扱い、身元確認時の支援者の付き添い、悲嘆モデルを用いた介入が示されていた。

課題として、精神科医や臨床心理士など精神保健の専門家による「心のケアチーム」の活動だけでなく、看護職を含めた医療職などが中心となり、復旧復興期も含めた遺族支援に向けてのネットワーク作りがあげられた。災害早期からのグリーフケアが継続して提供できるような体制作りが必要である。行方不明者の家族に対しては「あいまいな喪失」として通常の悲嘆介入とは異なる必要性が指摘はされており、長期にわたる介入のあり方が課題としてあげられる。

<調査2>「災害による死別悲嘆に関する量的調査」および「災害死別した遺族の質的調査」

被災地等の看護職への調査から、先行研究と同様に支援が必要な対象者には心理専門家との連携を図り、避難所や仮設住宅巡回時のリラクゼーションやリクレーションの場、体調把握時の機会など、日常の援助を通した関わりの中で遺族の語りを聴くなど取り組みがされていた。

また、看護職も災害慢性期にかけての長期的な支援の必要性は認識していたが、遺族のわかちあいの会の支援などは一部にとどまり、心理的な負担やネットワークが充実していないなど、災害急性期から継続して遺族に関わる困難さがみられた。今後は、災害看護分野でも急性期からの遺族支援を充実させるために、グリーフケアに関する知識や技術を向上させるための教育研修体制の強化が必要であると示唆された。

また、未発表であるが実際に東日本大震災で家族と死別した遺族3名を対象に、悲嘆反応やサポート状況についてインタビュー調査を行った。当初の予定よりも対象が少なかったが、がんなどの疾病による死別と比較し

て、後悔や自責に関して語られており、災害発生から時間が経過しても先行研究と同様に思慕や抑うつなどがみられていた。現実的な側面では仮設住宅など住まいや仕事など遺族自身の生活面が安定していない場合は、身体症状がみられるなど、サポートを望む一方で、周囲の関わりで傷つく経験を有していた。

<調査3>「グリーフケアに関するリーフレットの作成」

これまでの調査をもとに、あいまいな喪失を含めた災害におけるグリーフケアに関して、災害急性期からの看護職の支援について検討を行い、遺族支援の充実のために災害時のグリーフケアに関する冊子を作成した。

冊子の作成では、震災の経験者および被災者支援の経験のある看護職の調査で得られた結果から、悲嘆反応、悲嘆プロセスなどを内容に含めた。遺族の調査結果も考慮して、冊子の試案を作成した。作成過程では、災害看護の教育者と共に内容を検討し、修正を加えたサンプルの冊子を用いて、災害支援ナース、グリーフケアに携わる看護職に確認し、研修会の際に配布できるように整えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

1) 小林祐子 和田由紀子 災害におけるグリーフケアの国内文献の検討. 新潟青陵学会誌 8(1), 2015.

〔学会発表〕(計 1件)

1) 小林祐子 和田由紀子 災害看護におけるグリーフケアの国内文献の検討、第40回日本看護研究学会学術集会、2014年8月24日、奈良市

〔その他〕(計 1件)

1) 小林祐子. 配布用冊子：災害時のグリーフ. 20P. 2015年6月. 第一印刷所発行.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 祐子 (KOBAYASHI YUKO)

新潟青陵大学・看護福祉心理学部看護学科・准教授

研究者番号：20303232